

映画

私らしく生きる覚悟 性別適合手術を受けた大学生追う 「女になる」元町映画館で来月4日公開 /兵庫

毎日新聞 2017年10月28日 地方版



「きちんと向き合えば一人の人間として理解してもらえるはず」と話す中川未悠さん（右）と、「サバツとしていてちゃんと核を持ち、覚悟がある」と中川さんを評する田中幸夫監督＝神戸市中央区で、木田智佳子撮影

男から女へと性別適合手術を受け戸籍上も女性になった神戸の大学生、中川未悠さん（22）の手術前後を追った映画「女になる」（田中幸夫監督）の西日本での封切り上映が11月4日、元町映画館（神戸市中央区）で始まる。「爽やかLGBTsドキュメンタリー」のサブタイトルが示す通り、自分らしく生きることを決断した性的少数者と周囲の人々の姿を軽やかに描いている。【木田智佳子】

中川さんは神戸芸術工科大ファッションデザイン学科4年。男子学生として入学し、19歳からホルモン注射の治療を始めて性転換した。既に女性として就職も決まっている。

幼い頃から自分の性に違和感を持ち、女の子という方が落ち着いた。からかいの言葉には「私はおかまです～」などと軽い調子で返した。「自分をオープンにすることがよかった」と振り返る。だが、実は深く悩んでいた。「家族や世間にとってやはり私は男。心はずっと女の子なのに」

高2年の夏、泣きながら親に悩みを打ち明けた。「いつか手術をして本来の自分に戻る」と決め、アルバイトで資金をためた。大学では教員らにも自分で事情を話し、理解は広がった。

映画化は自分で思い立ったという。性的マイノリティーの人たちを追った田中監督＝芦屋市出身＝のドキュメンタリー「凍蝶圖鑑（いてちょうずかん）」（2014年）を観賞。LGBT（同性愛者や体と心の性が一致しない人たちの略）の枠を超えた人々の生き方に心を打たれ、「私を撮ってほしい」と田中監督に直訴した。

中川さんの覚悟を受け止めた田中監督は、昨秋から今春にかけて神戸市の元町や三宮、大学構内などで撮影した。男性器を切除して膣を作る手術室にもカメラは入った。「LGBTの割合は、日本ではA B型や左利きの人と同じくらいという調査もある。ダイバーシティ（多様性）を認め合う社会の萌芽（ほうが）を映画で刻印できたのではないか」と田中監督は語る。

同じ事情の仲良し3人組が恋愛について話す“女子トーク”の場面からは、それぞれが抱えてきた苦悩と「私らしく」生きようとするしなやかさが浮かび上がる。「映画で私のような子を応援したい」と撮影に臨んだ中川さん。「私みたいな子が身近におることを理解していただけたらうれしい」と話している。

企画・製作・配給は風楽創作事務所（神戸市須磨区）。74分。上映開始時間は、4～10日が午後8時、11～17日が午後5時10分。初日の上映後に田中監督と中川さんら出演者が舞台あいさつする。大阪・十三のシアターセブンでも12月2～15日、「ダイバーシティ映画祭」の一環で上映される。

〔神戸版〕